1

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（設問に字数制限のある場合は、句読点や符号も一字と数えます。）

連れて行ってやるつもりだったが、貞子があんな調子なのでと晋平（信雄の父）は言った。信雄と喜一は仕方なく自分たちだけで近くにある浄正橋の天神さんに行くことにした。

「あんまり遅うまで遊んでたらあかんでェ」

晋平は信雄と喜一の手に、数枚の硬貨を握らせた。

「銀子ちゃんは行けへんのん？」

信雄が二階に声をかけると、

「うん、うち行けへん」

しばらくして銀子の言葉が返ってきた。

二人は夕暮の道を駈けだした。

近くといっても、信雄の家から浄正橋までは歩いて三十分近くもかかる距離であった。堂島川のほとりを上っていき、堂島大橋を渡って北へ歩いて行くうちに、お囃子の音が大きく聞こえてきた。

大通りを曲がり、※仕舞屋が軒を連ねる筋に入ると、陽の沈むのを待ちあぐねた子供たちが、道にうずくまってもう花火に火をつけている。酒臭いはっぴ姿の男が、同じ柄のはっぴを着た幼な子を肩に乗せて、ぶらりぶらりと神社に向かっている。そのあとを喜一と並んで歩きながら、にわかに大きくうねりだした祭り囃子に耳を傾けていると、①信雄はなにやら急に心細くなってきた。

「僕、お金持って遊びに行くのん、初めてや」

②ときどき立ち停まると、喜一はそのたびに掌を開いて、晋平からもらった硬貨の数を確かめた。

信雄は自分の金をそっくり喜一の掌に移した。

「僕のんと合わしたら、何でも買えるで」

「そやなあ、③あれ買えるかも知れへんなあ」

信雄も喜一も、火薬を詰めて飛ばすロケットのおもちゃが欲しかったのである。恵比須神社の縁日でも売っていたから、きっと今夜も売っている筈であった。

天満宮のような巨大な祭りではなかったが、それでも商店街のはずれから境内への道まで露店がひしめきあっている。人通りも多くなり、スルメを焼く匂いと、露店の莫蓙の上で白い光を発している※カーバイドの悪臭が、暗くなり始めた道にたちこめて、信雄も喜一もだんだん祭り気分にうかれていった。

喜一は硬貨をポケットにしまい、信雄の手を握った。

「はぐれたらあかんで」

人混みを縫いながら、二人は露店を一軒一軒見て歩いた。

水飴屋の前に立ったとき、

「一杯だけ買うて、半分ずつ飲めへんか？」

と喜一が誘った。ロケットを買ってからにしようという信雄の言葉で

しぶしぶその場を離れたが、こんどは焼きイカ屋の前でも同じことをせびった。飲み物や食べ物を売る店の前に来ると、喜一は必ず信雄の肘を引っぱって誘うのだった。

「きっちゃん、ロケット欲しいことないんか」

喜一の手を振りほどくと、信雄は怒ったように言った。

「ロケットも欲しいけど、④僕、いろんなもん食べてみたいわ」

［　　］をとがらせて、喜一は脛の虫さされのあとを強く掻きむしった。いつのまにか空はすっかり暗くなり、商店街に吊るされたちょうちんにも裸電球にも灯が入って、急激に増してきた人の群れがその下で押し合いへし合いしている。

すねたふりをして一歩も動こうとしない喜一を尻目に、⑤信雄はひとり境内に向かって歩きだした。歩き始めると、人波に押されて立ち停まることもできなくなってしまった。喜一の顔が遠ざかり見えなくなった。

信雄は慌てて引き返そうとした。色とりどりの浴衣や団扇や、汗や化粧の匂いが、大きな流れとなって信雄を押し返す。やっとの思いで元の場所に戻って来たが、喜一の姿はなかった。信雄はぴょんぴょん跳びあがってまわりを見渡した。いつのまにすれちがったのか、人波にもまれている喜一の顔が、神社の入口の所で見え隠れしていた。

「きっちゃん、きっちゃん」

信雄の声は、子供たちの喚声や祭り囃子に消されてしまった。喜一は小走りで先へ先へと進んでいく。⑥相当※狼狽して信雄を捜しているふうであった。信雄は大人たちの膝元をかきわけ、必死で走った。何人かの足を踏み、ときどき怒声を浴びて突き飛ばされたりした。境内の手前にある風鈴屋の前でやっと喜一に追いついた。赤や青の短冊が一斉に震え始め、それと一緒に、何やら胸の底に突き立ってくるような冷たい風鈴の音に包み込まれた。信雄は喜一の肩を掴んだ。喜一は泣いていた。泣きながら何かわめいた。

「えっ、なに？　どないしたん？」

よく聞きとれなかったので、信雄は喜一の口元に耳を寄せた。

「お金あらへん。お金、落とした」

風鈴屋の屋台からこぼれ散る⑦夥しい短冊の影が、喜一の歪んだ顔に映っていた。

信雄と喜一はもう一度商店街の端まで行き、地面を睨みながらじぐざぐに歩いた。再び風鈴屋の前に戻って来たが、落とした硬貨は一枚も見つからなかった。喜一のズボンのポケットは、両方とも穴があいていた。

信雄が何を話しかけても、喜一は黙りこくったままだった。⑧人波に乗って二人は境内に流されていった。

（宮本輝「泥の河」による）

※　仕舞屋……商店街の中にある住宅。

※　カーバイド……ここでは、カルシウムカーバイド。水を加えると発生するアセチレンガスを燃やして、明かりとする。

※　狼狽して……あわてて。

問一　――線部①「信雄はなにやら急に心細くなってきた」とありますが、信雄が「急に心細くなってきた」原因として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　もう花火を始めている楽しそうな子供たちを見たこと。

イ　夕暮れの街を、知り合ったばかりの喜一と二人で歩いていること。

ウ　同じ柄のはっぴを着た、祭りへ向かう父子連れをみたこと。

エ　家から三十分も離れた、知らない街並みを歩いていること。

問二　――線部②「ときどき立ち停まると、喜一はそのたびに掌を開いて、晋平からもらった硬貨の数を確かめた」とありますが、このときの喜一の気持ちを、次のように説明しました。［A］・［B］共に二字で、あてはまることばをそれぞれ文中からぬき出して答えなさい。

［A］を持って［B］に行けることがうれしくて仕方がない。

問三　――線部③「あれ」について、次の問いに答えなさい。

(1)　「あれ」が、指し示すものを、できるだけくわしく、文中からぬき出して答えなさい。

(2)　なぜ、そのものの名前ではなく、「あれ」と言ったのですか。その理由として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　はっきり口にすれば、欲しいという気持ちがおさえられなくなってしまうと思ったから。

イ　「あれ」と言うだけで、それが何なのかすぐにわかりあえるという思いがあったから。

ウ　数がすくないので、口にするとだれかが聞きつけて先に買ってしまうかもしれないから。

エ　危険なものとして学校で禁止されているので、口にすると学校に知らされるおそれがあったから。

問四　――線部④「僕、いろんなもん食べてみたいわ」とありますが、この喜一の希望に対する信雄の答えを、文中から十四字でぬき出して答えなさい。

問五　［　　］にあてはまることばとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　鼻　　**イ**　口　　**ウ**　目　　**エ**　腕

問六　――線部⑤「信雄はひとり境内に向かって歩きだした」とありますが、このときの信雄の思いとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　分からず屋の喜一に腹が立って仕方がない。もう喜一を見捨てて、自分ひとりで行こう。

イ　喜一をほうっていくつもりはないが、自分が先に歩きだせば喜一もきっとあきらめて追いかけてくるだろう。

ウ　もう喜一にかまっていれば目的を達することはできなくなる。悪いけれど、自分ひとりだけでも先に行こう。

エ　自分は自分、喜一は喜一、もし喜一が自分と同じ気持ちなら、後から付いてくるだろう、こなくてもかまわない。

問七　――線部⑥「相当狼狽して信雄を捜しているふうであった」とありますが、喜一がそうしている理由となる一文を、文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

問八　――線部⑦「夥しい短冊の影が、喜一の歪んだ顔に映っていた」とありますが、このときの喜一の心情として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　後悔　　**イ**　あせり　　**ウ**　絶望　　**エ**　怒り

問九　――線部⑧「人波に乗って二人は境内に流されていった」とありますが、この表現から読み取れる二人の様子として、最も適当なもの

を次から選び、記号で答えなさい。

ア　二人が、ぬけがらのようになって、何も考えられずに道を歩いている様子。

イ　二人が、どうにもあきらめきれずに、下を見てさがしながら歩いている様子。

ウ　二人が、たがいに相手に腹を立てながら、口もききたくないと思って歩いている様子。

エ　家に帰ってしかられるのを恐れて、帰るに帰れないまま、仕方なく歩いている様子。

問十　この文章の感想として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　次々に意外な展開になるストーリーで、次はどうなるのかとハラハラドキドキさせられる。

イ　主人公の心情が細かくていねいに描かれていて、心の移り変わりが実によくわかる。

ウ　二人の主人公の対照的な性格が見事に描き分けられていて、物語に緊張感を作り出している。

エ　色彩豊かな美しい絵画か映画を見ているようで、物語が目の前に浮かぶようだ。

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。（設問に字数制限のある場合は、句読点や符号も一字と数えます。）

……地球上では、生き物がお互いに「食べる・食べられる」という関わりの中で、生命のバランスを保っています。そして、生き物と生き物を取り巻く環境が関係しあって、生命の※循環を作り出しているシステムを「生態系」と呼んでいます。この、「生態系」という言葉、覚えておいてくださいね。（筆者）

オオカミとシカの、実際にあった話をしましょう。

北海道には百年ちょっと前まで、エゾオオカミが生息していました。森でエゾオオカミはエゾシカを食料とし、エゾシカはドングリなどの木の実や樹皮、草などを食べるというつながりが、長く続いていました。

エゾオオカミ、エゾシカ、森の植物――この三者の間には、どれかが異常に増えないように、バランスが保たれていたのです。

仮に、エゾシカが増えたとします。すると、［あ］が食べる森の植物が減少しますが、［い］にとってはエサが増えたことになりますから、［う］が増える。すると［え］は食べられて数を減らし、その結果、荒らされた森の植物は元に戻り、エサを減らした［お］の数も元に戻る。そんなことをくり返して、北海道の自然界は、生態系のバランスを維持してきたのです。

ところが、明治時代になると、①そのバランスが崩れる事態が起こります。

「蝦夷地」が「北海道」へと呼び名が変わり、開拓使という官庁が北海道の開発を指揮しはじめました。開拓使の三代目長官は薩摩藩出身の黒田清隆です。薩摩藩はいまの鹿児島県ですが、南国出身の黒田には、北海道のことがよくわからなかったのかもしれません。北海道に※畜産を興すことを決め、アメリカ人技術者の指導を仰ぐことにしました。

アメリカ人技術者は「エゾシカの肉を缶詰にして輸出し、※外貨を獲得する」という方針を打ち出し、エゾシカの大量※捕獲が始まります。その方針に追い打ちをかけるように、一八七九（明治十二）年と八一（明治十四）年には記録的な豪雪が北海道を襲い、エゾシカが大量死するという不幸が重なりました。

エゾシカはほぼ絶滅してしまいました。［A］困るのは、エゾシカをエサにしていたエゾオオカミです。エサを求めて、牧場のウマを襲うようになりました。

これはまずいと、アメリカ人技術者はエゾオオカミの殺戮を命じます。銃で撃ったり毒薬で殺したりしたうえ、殺した人には懸賞金が贈られたそうです。そして一九〇〇年、ついにエゾオオカミの絶滅宣言が出されました。

それからしばらく、北海道では人間が安心して暮らせる時期が続きました。エゾオオカミに襲われる心配をせずに、家畜が飼えたわけですから。

ところが百年後のいま、②たいへんなことが起きています。

極端に数を減らしたエゾシカが、天敵のエゾオオカミがいなくなったことで勢力を盛り返しました。エゾシカが牧草や農作物を食べることで受ける農林業の被害総額は、年間三十億円弱と推定されます。ニレやナラなどの木の芽や樹皮を食べることが原因で、立ち枯れを起こす樹木も少なくなく、いま、※阿寒の森は※消滅の危機に瀕しています。

人間というのは、つくづく身勝手な生き物ですね。今度は、

「エゾシカは悪い動物だ」

「増えすぎたエゾシカを殺すべきだ」と言いはじめたのです。③増える原因をつくったのは自分たちだということを忘れて。

もしもいま、エゾシカを殺したら、④今度はどうなるでしょうか。

生態系というのはジグソーパズルのようなもので、一枚一枚のピースが全体の構成に※寄与しています。エゾシカのピースがあったところに別の動物のピースが入ってくるということは、北海道の自然環境が変わることを意味します。「変わる」と一口にいっても、いままでいなかったような虫や生き物が異常に増えた結果何が起こるかは、まったく予想がつきません。

旭山動物園に、「オオカミの森」と「エゾシカの森」をつくったのは、こういう過ちを二度とくり返してはいけないという思いを、みなさんに伝えたかったからです。

みなさんは、明治時代の人たちはなんてひどいことをしたんだと、思

ったかもしれません。しかし、五時間目の最初の質問を思い出してみてください。

ボウフラがわくような沼(ぬま)は、きたないから公園に変えたほうがいい、クモもコウモリもヘビも気持ちわるいからいらないという考え方は、百年以上前の黒田清隆開拓使長官やアメリカ人技術者たちと、おなじかもしれませんね。

生き物に「よい」「悪い」はありません。それは人間の勝手な分類です。みんな地球という生態系の仲間なんですよ。

（小菅正夫「ペンギンの教え」による）

※ 循環……一回りすること。
※ 畜産……牛や馬など家畜を利用する産業。
※ 外貨……外国のお金。
※ 捕獲……いけどること。
※ 阿寒……北海道東部、釧路市の地名。旧町名。タンチョウが生息。
※ 消滅……消えてなくなってしまうこと。
※ 寄与……役に立つこと。

問一 [あ]〜[お]には、「エゾシカ」か「エゾオオカミ」のどちらかがあてはまります。このうち、「エゾオオカミ」があてはまるものとして、適当なものを**すべて**選び、その記号を答えなさい。

問二 ――線部①「そのバランスが崩れる事態が起こります」とありますが、「バランスが崩れる事態」とは、どのようなことですか。その内容として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 黒田清隆が北海道開拓使の三代目長官になったこと。
イ 北海道を記録的な豪雪が襲ったこと。
ウ エゾシカがほぼ絶滅したこと。
エ エゾオオカミが牧場の馬を襲ったこと。

問三 [A]に入るつなぎことばと同じはたらきのつなぎことばが文章中の[　]に当てはまるものとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 雨が降った。[　]遠足は決行された。
イ ふたを開けた。[　]たちまち、甘(あま)いかおりが一面に漂(ただよ)ってきた。
ウ 勉強が十分できなかった。[　]点数が悪いのは仕方ない。
エ 激しい雨が降ってきた。[　]強い風までふいてきた。

問四 ――線部②「たいへんなこと」とありますが、その内容を次のようにまとめました。[A]には六字で、[B]には十四字で、あてはまることばをそれぞれ文中からぬき出して答えなさい。

> 急増したエゾシカが食べる[A]の被害が、年間数十億に達し、さらに[B]も食べることで、阿寒の森は、消え去ろうとしている。

問五 ――線部③「増える原因をつくった」とありますが、「つくった」とは、どうしたことを言っているのですか。それが具体的に述べられている一文を文中からぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

問六 ――線部④「今度はどうなるでしょうか」とありますが、筆者はどうなると考えていますか。その内容を説明したものとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 絶滅したはずのエゾオオカミが復活して人々に被害を与える。
イ エサにされなくてすむ森の植物がどんどん増えて、森がふもとの町や村まで飲みこむ。
ウ エゾシカのかわりに別の動物が入ってくるだろうが、その先のことは分からない。
エ エゾシカもエゾオオカミもいないのだから、もう何も起こらず、変化もしない。

問七 ――線部「オオカミとシカの、実際にあった話」（本文一行目）とありますが、この話が述べられているのは、本文二行目からどこまでですか。その終わりの七字をぬき出して答えなさい。

3

次の①〜⑤の文の[　]には、体の一部をあらわす漢字一字があてはまります。その漢字一字を答えなさい。

① この際、おたがいに[　]を割って話そうじゃないか。
② かれは[　]がかたい男だ。信用できる。
③ あの乱暴者は、ときどき[　]がつけられなくなる。
④ ほしくても、[　]をくわえて見ているしかない。
⑤ お借りした百万円、[　]をそろえてお返しします。

4

次の①〜⑤の各組のことばの中には、他のことばとは性質のちがうものが一つずつ入っています。そのことばとして、最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① **ア** あさひ　**イ** 友だち　**ウ** 平和　**エ** 富士山
② **ア** それ　**イ** ここ　**ウ** あちら　**エ** こう
③ **ア** ざあざあ　**イ** てくてく　**ウ** ゆらゆら　**エ** めそめそ
④ **ア** ひとり　**イ** たくさん　**ウ** 三回　**エ** 五本
⑤ **ア** 笑い　**イ** 美しい　**ウ** 悲しい　**エ** うれしい

5 次の①～⑤の熟語と反対の意味の熟語を、あとの□の中の漢字を組み合わせてつくり、それぞれ答えなさい。

① 全体
② 結果
③ 理想
④ 義務
⑤ 平和

実 因 権 原 部 争 現 分 利 戦

6 次の①～⑤の文の――線をつけたカタカナを、漢字になおしなさい。

① センモンカに話を聞く。
② テンランカイに作品を出品する。
③ 最新のソウビを隊員に配る。
④ 庭に雪がたくさんツもった。
⑤ 京都のお寺をタズねて歩く。

【問題は、ここで終わりです】